廣く開き居るか。母の姿を見ずに、聲ばかりを聞て、之を母の聲であると認むるのは何時頃よりはじまるか。

音樂上の種々の音に對して、愉快の顏容をあらはすのは何時頃よりはじまるか。鋭き音又は調和せぬ音に對して、不愉快の顏容をあらはすのは何時頃よりはじまるか。

遠方の音響は、どんな種類のものが、初めて小兒に認めらるゝか。又最も屢認めらるゝは何であるか。小兒が屢聞く音響に對して、平氣で居るのは何時頃よりはじまるか。小兒が自ら紙片を破りて音響を發し、又は机を敲きて音響を發し之を喜ぶのは何時頃よりはじまるか。

史傳

野村望東尼（つゞき）

下村三四吉

望東尼が平尾の山莊は、勤王の事歷と淺からぬ關係ありき。かの方外の僧侶にて憂國勤王の念こゝに深く、幕吏のためにつけまとはれて、遂に西鄕隆盛と共に身を薩摩の海に投してはてたる月照師が福岡に來りしときも、同藩の月形、鷹取、平野、早川等の志士がこれを誘ひて密會せるもこゝなり、平野國臣は、しば〳〵尼の庇護によりて身をこの山莊にひそめしことあり。また、月形、早

川等が西郷隆盛をここに誘ひて、薩長連和の端緒を開きたることあり。高杉晉作が、しばらくこゝに世をしのびて、尼の厚誼を受けしことは、前に詳しく述べたるが如し。望東尼が、藩の俗論黨に構へられて、幽閉の身となりつるも、かく平生勤王の志士に交はり、そをかくまへることさへありけるためなり。國家のために力を竭して、奇禍にあへるは、もとより尼の甘んぜるところにして、

「浮雲のかかるもよしや、ものゝふの、やまと心のかずに入りなば。」

との歌によりてもよくその心事を知るに足れり。さはいへ、思へば不幸のきはみなりけり。

望東尼が幽閉中の情況は、その手に成れる『比賣島日記』のはじめに詳しく記されたれば、その中のところどころを左に引きて、彼をして自ら語らしめよ。

はじめ幽閉せられしは、彼が自宅にて、ころは六月の末つかたなれば、暑氣はげしう人にせまりて、たださへ堪へがたきを、まして、

「ひと間におしこめられて、親類どもかよりき守れば、いみじうわつけきに、庭にだに得いでずて、軒はにはへる朝顔のみながめくらして、

物ふかく、今は思はじ、あさがほも、あさき色こそ、めでたかりけれ。

いつしか七月に入りて、三日月を見ては、

初秋の、まづ見にそむる、三日月の、影をへだつる、夜半のうき雲。

と咏じ、まどにはひかかりたる朝顔の種なれるを採りなどしては、

あさがほの、花より先と、れもふ身の、

こんどしさかん種をとりつつ。

と歎じて、はや自らなき身なりとの決心をあらはせり。

「くもりがちに、あつけさも、過しがたげに、たれもいふめり。

ひとたびは、野分の風の、はらはずば、

清くはならじ、秋の大空。

時事に比し來りて、感慨何ぞ深きや。

「十日あまりの月、れもやの家上よりいでて、むぐらの軒にもれきつつ、たごの水にさし入りたれば、

ただならず、新しき秋の月のみぞ、濁らぬ

水のこころ知りける。

心事公明正大にして、一點のやましきところ、暗きところなし。しかも、世事意の如くならず、暗雲時に光明を蔽ふ。秋月の歌、誦し來れば、菅相公の筑紫謫居中の「海ならずただよふ水のそこまでも、清き心は、月ぞてらさん。」との詠に想到し、世を隔てて、兩者の境遇相似たるを悲むの念に堪へず。

奇禍は、尼の身の上のみならで、その僕童にまで及び、獄につながれき。蓋し尼の事に關して嫌疑を受けたるならん。尼は、これに切なる同情をよせて、

「めしつかひたるをとこわらはが、ゆくりなく捕はれて、ひとやにものせられつるこそ、あはれにかなしくも、はためざましけれ。

わか竹の枝もよわきに、葛かづら、かかるは何のうらみなるらん。

「すぎにし日とらはれしわらはがゆるされて、さ

とにかへりたりと聞きて、

わか竹にまとひし葛のうらとけて、吹き
かへしつる風ぞすずしき。

これのみこそ、このごろのよろこびにはありけれ。

と記したり。尼が平素の用意は、これによりても見ることを得べし。

望東尼の孫助作も、祖母と同じ禍にかかりて、共にその家に幽囚せられしことは、前に一言せり。然るに、間もなくして、尼は、その家族とひき分かたれて、更に里方にあづけらるることとなりぬ。哀しみの上の哀しみなり。

「うまこなるものさへ、おなじぬれぎぬにつつまれて、家のかた〳〵にうもれたりつるに、同じ家に二人あらんことさへ、かなはずなりて、れやのすみにし故郷にうつしやらるるを、二人のうまごはさらなり、女どもみなかなしび、わびてどもすれども、かなはず。つひに、居待の月ともろ共に、家を出づるとき、故ある扇のありけるにかいつけて、はしらにかけて、わかれす。

かへらでも、正しき道のすゑなれば、たれもなげくな、われもなげかじ。

など、心つよげに物したれど、のりものに乘るより、なみだせきあへず、いつのかどでにやとおもふに、うつつげもなし。

のりものの、おもひもかけぬをすごしに、居待の月を見るぞかなしき。

慘痛にして、胸さかるる心地す。かくて、遷されて、ふるさとに至れば、

「目なれにし故郷の庭もやうかはりて、月にかかやく露の玉も、身にふることいかばかりなどれもふさへくるし。

座敷因てふものにれしこめて、猶、うから、やから、夜ひる、かはる〳〵二人三人してぞ守れる。ここよりも、月のかもは見えずして、たゞ庭にてらす影のみこそ見ゆれ。かくれ家にものしたりし、山邊の庵など、をかしさ頃はひなめるを、かきたえて行かぬ間に、月のさかりも、過がたになりぬるなど、とりあつめてぞおもふ。

我がいはの月も、さびしと、すみぬらん、
ゆきて居待の人もなければ。

「ゆふしでに、老がいのちをかけまくも、かしこき御世をいのる頃かな。」と、國家の爲に餘命をささげんと決心せし尼も、この景に對しては、さすがに、久しくすみなれし山莊のかもひ出でらるるも、人情の常なりけり。

（つゞく）

文苑

古茂藏

露國　イバン、クリロッフ原作
日本　新保　磐次　飜案

或る日乞食の古茂藏は門並み貰ひあるいて大分疲れたから、町はづれの道ばたに腰かけて獨言を始めた。

『世間の人はなぜあんなに慾張つてるだらう。立派な風をしてゐて一文や二文の錢を快く與れる者はない。「溜まれば溜まる程汚ないとは」